

住家被害認定調査等へのデジタル技術導入に係る研究会(第3回)議事要旨

【開催日】 令和5年2月6日(月) ※オンライン開催

【議 題】

- (1) 今年度検証に関する報告
- (2) 来年度開発イメージについて
- (3) デジタル技術導入後のフローについて
- (4) 実証実験について

【議事概要】

- (1) 今年度検証に関する報告

◆主な発言：

- 今年度のAI精度向上策の一つとして「素材・被害・背景の3つのAIモデルの判定結果の組み合わせ」と「内閣府運用指針における損傷程度Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ」とを整合させた対応テーブルを設け、木造の外壁が損傷した学習データ画像を各々紐付け(ラベル付け)を実施した。
- 印象としてはワンランクぐらいの違いがあるような感じがするが、今年度の検証成果の一つとして確認し、今後の開発に役立てる。

- (2) 来年度開発イメージについて

◆主な発言：

- 昨年度は「損傷個所の検知」と「損傷の程度判定」をAIで自動に行うことを試みたが、今年度は、昨年度の検証結果を踏まえて、精度向上に注力するため、画像データの損傷個所を切り出して「損傷の程度判定」のみAI判定するモデルで検証した。
- 今の検証の形は、精度を出すことには長けているかもしれないが、現場での手間が煩雑になり、運用面に課題がある。この点は次年度の仕様で考慮したほうが良い。
- 損傷箇所の範囲指定は長方形だけか。内閣府の運用指針では窓などの開口部は外壁の壁面から除くとされているが、その部分は自動的に除かれるのか。また、屋根が被っている部分を除いたり、斜めから撮った場合に台形のような形の選択はできないか。

- (3) デジタル技術導入後のフローについて

◆主な発言：

- これまでの議論の論点整理を行ったことによって、どこに向かっているのかが明確になった。将来を見据えたときにいろんな議論が進んでいく。
- 画像データについて、現場から庁舎に戻りパソコンに移し変えるのは、大変煩雑な作業である。物件の特定とセットで、画像データが紐付けできると良い。
- DXは、本来一つの標準化されたシステムの上で、あらゆるシステムがスタンドアロンのように動いて、必要なデータだけが共通の標準言語なりで共有できるような仕組みを作っていかなければならない。今回のシステムも、この標準化に基づいているところを担保した方が良い。今後、改良拡張していくときに大事になってくる。
- 災害が起きたときに、AI 開発に資する学習データを集める仕組みがあると、今後AI が進歩したときに役立つのではないか。
- 現場での面積率算出作業の効率化は極めて難しい課題だと思う。段階的に、図面への書き込みからの部分が効率化できれば、ユーザーに喜ばれると思う。
- 都内で、住家が密集したところで使う仕組みという部分を、しっかりと考えていかないといけないのではないか。

(4) 実証実験について

◆主な発言：

- 実際の木造建物を用いて、プロトタイプの実証実験を実地開催する予定である。